

# 随想

## 二〇年前の将来予想

### 時代の変遷と予想の対比

加藤 宏光

邦光史郎氏の筆による『十年

後』という本がある。刊行が一

九九二年であるから、今からお

よそ二〇年前に出版されたこと

になる。実は、この前、一〇年

に出された予想本を振り返り、

二十一世紀を予想したものであ

る。こうした、予想は設定され

たより、かなり時代が進んでか

ら振り返る方がよく理解できる。

この内容でも当たっているこ

とより外れていることがかなり

多い。

ちなみに、当たっているもの

●おばあちゃんに牛耳られる日

●アメリカの凋落

●二十一世紀はEC(現在EU)

の時代

●年金支給年齢引き上げられ、

定年がなくなる

●微生物が環境分野で活躍

●地球上どこにいても位置がわ

かる

●カネ、物、人は、さらに首都

圏に集中する

●水産業が注目される

外れているもの

●大独裁者の出現

●自殺の美学が持て囃される

●嫌風邪権が叫ばれる

●在宅診断の普及

●アフリカに牧草工場が誕生、

飢餓を救う

●セールスマンはコンサルタン

トになる

●定年後の桃源郷が流行

等々である。通読して、一部

は当たっているが、これから一

〇年、二〇年かけて、その方向

を目指すテーマが多い。当たら

ぬものには、国際社会が思うに

任せぬことが起因し、まさに人

間社会の不思議を表している。

この書物の巻末近くに、以下

の記述がある。

「二〇年後はさらに暮らしく

くくなっている」、「二十一世紀

は女の時代である」さらに「二

〇年後には、イトーヨーカドー

し、究極の製造、直販を現実の

ものにしていく」

というものである。これら三

つの予想は改めて考えると実現

されているあるいはされかけて

いる、とも言えよう。とくにスー

パーが農業に手を出す、という

情報は昨今マスコミを賑わして

いるので、身近に感じることも

多い(その実態は看板効果以上

には成長していない、という)。

併せて、工業生産分野からの植

物工場という情報も少なくない。

注目されている点は今見ても興

味深い。

●全天候型植物工場が全盛を極

める

●花工場が花の流通形態を一変させる

●農業の海外生産がはじまる

●農村や漁村で電気エネルギー生産の副業が始まる

●農村のいたるところに滑走路ができる

二〇年前はバブル真最中、経済がまだまだ右肩上がりです。伸長すると考えられていたなかでの予想であることは、バブル崩壊と遅々たる回復の後にリーマンショックの苦みを味わっている今日では、少なからずズレを感じる。

また、一九九八年に経済および社会評論家、唐津一氏の出した一九九八年の分析がある。唐津氏は一九九九年に満州で生まれ、東大工学部電気工学科を卒業後、日本電電公社、松下通信工業株式会社を経て東海大学教授を勤めながら、種々の論説本を著述されている。その論調は、長年の経験と鋭い分析から、教えられるものが多い。

ここで取り上げたのは、タイ

トルが『アメリカはこれで大丈夫か』とされ、副題に「その時日本が世界を救う」とされている。例によって目次を追ってみる。

構成は次の五章からなる。  
第1章 破綻が見えはじめたアメリカ

第2章 二十一世紀を模索するヨーロッパ

第3章 アジアは本当に再生できるのか

第4章 技術があるかぎり、日本は沈没しない

終章

これら全てを紹介するには、紙面が足りないのです。目を引くところについて章を問わず、つまみ食いしてみよう。

●ニューエコノミー理論のウツ握るといふ危うさ

●米国債の大半を日本と中国が握るといふ危うさ

●ヨーロッパの失業率はどこも二ケタ

●イタリア式「売れる商品は増産するな」

産するな」

●ISO認証にみる他者不信の発想

●日本の円安が招いた経済危機

●もはや日本なしでは成り立たないアジア経済

●アジアに移転された昔の日本の技術

●金融界がだめでも、日本経済は困らない

●一ドル八〇円時代の努力が日本を支える

●お金はあるのに消費は下落

●新技術の大爆発

●今の不況はマスコミ不況

●いくらでも出てくる新ビジネスのヒント

唐津氏の論説は昔より非常に示唆に富む。とくにこの書物の内容はあらためて取り上げるに値する、と考えている。

先に上げた邦光氏の予想本にしても、唐津氏の一〇年前に執筆された世界経済の分析本にしても、十分な時間が過ぎてのちに読み返すと執筆者の実力が実感できる。

この随想を、BSIでマリナー

ズとレッドソックスの試合を観ながら書いている。試合は大雨の中で行われ、その雨の中でも、ファンは濡れながら立ち去ることなく観戦している。

リーマンショックの後、アメリカ経済はどん底と評されて一年になり、失業率は一〇%に近づきつつある。そうした環境下で、大リーグを観戦している人々がこのように多数いる。全ては世間の広さを考慮しながら思考することの大事さを実感する。

今日という日にテレビや雑誌、新聞で植物工場がしばしば取り上げられるのを見聞すると、時代の変遷と予想を対比して考えることの重要性を痛感する。

養鶏をはじめとした畜産産業は、先に述べた農業の工業化を幾世代も先駆けて実現したものである。植物生産農業が思考錯誤しながら、ヨチヨチと工業化し始めたのに比較して、大いに胸を張ってよい。